

第3巻1号 2021年3月

秀明大学看護学部紀要

Journal of Faculty of Nursing

資 料

老年看護学概論受講後の看護大学生の持つ高齢者イメージ

石津仁奈子・石川りみ子・江口 恭子

 秀明大学看護学部

Shumei University Faculty of Nursing

 資 料

秀明大学看護学部紀要
P.51-59 (2021)

老年看護学概論受講後の看護大学生の持つ高齢者イメージ Image of elderly people held by nursing college students after studying the introduction to gerontological nursing

石 津 仁 奈 子 ¹⁾

Ninako Ishizu

石 川 り み 子 ¹⁾

Rimiko Ishikawa

江 口 恭 子 ¹⁾

Kyoko Eguchi

要 旨

近年の超高齢社会の現状から、看護基礎教育における老年看護学への役割期待も大きくなっている。そのため、老年看護学概論受講後の学生の持つ高齢者のイメージを明らかにし、得られた知見を老年看護学の授業や老年看護学実習の基礎資料とする目的で質問紙調査を実施した結果、以下が明らかになった。

1. 高齢者との関わり頻度と性格のポジティブな記載、高齢者への関心と性格のポジティブな記載、対人関係のネガティブな記載、認知症の方との関わり経験と対人関係のポジティブな記載に関連があった。
2. 社会的特徴（対人関係）については、ネガティブな記載が多く挙げた。
3. 学生の持つ高齢者イメージは授業の影響を受けていると考えられる。

以上を踏まえ、「若い」を生きる高齢者を支える基盤として高齢者理解が深まり、高齢者に対する正しいイメージを持ち、高齢者のもつ「ポジティブ」な側面にできる限り目を向け働きかけられるような学修方略の工夫と高齢者と接する機会を増やすことが高齢者理解に必要であることが示唆された。

キーワード：高齢者イメージ、老年看護学、ポジティブ、ネガティブ、老年看護学概論

Key Words：Image of the elderly, Gerontological nursing, positive, negative,
Introduction to gerontological nursing

I. 緒言

わが国の近年の超高齢社会の現状から、看護の対象に占める高齢者の割合も増え¹⁾、看護基礎教育における「老年看護学」への役割期待も大きくなっている。高齢社会白書²⁾によると、世帯構造別の構成割合は、三世代世帯は減少傾向であり、2017年は11.0%であった。先行研究においても、家族形態の変化に伴い、近年、学生が高齢者と接する機会は減っており³⁶⁾、さらに、学生自身が、老化現象の体験がないため、老化による「健康問題に応じた看護」や「身体的・精神

心理的・社会的特徴」を理解することが難しい³⁾ことが明らかになっている。老年看護学は、「加齢に伴う病気や障害が高齢者の生活の質（QOL）に与える影響を科学的に分析し、その人らしい人生を全うするために必要な援助方法を追求する学問」⁷⁾とされている。しかし、核家族化が進む中、高齢者と接する機会が減少し、高齢者の身体的・精神的・社会的特徴を机上でしか知らない学生が増えている。

本研究の対象者は、1年次に老年看護学概論で、老いの意味や老いを生きる人の理解のための総論的な学修を終えているが、支援の実際やその人らしさを尊重した生活を支える看護に関しての学修は未修の段階である。高齢者看護を実践するためには、具体的に高齢者をイメージし、また理解したいという気持ちを持ち、

1) 秀明大学看護学部

1) Faculty of Nursing, Shumei University

コミュニケーションをとりながら関係性を築いていく必要がある。そこで本研究では、老年看護学概論受講後の学生の持つ高齢者イメージを明らかにし、老年看護学の授業や老年看護学実習に向けての基礎資料として教育方略の示唆を得ることをめざす。

Ⅱ. 研究目的

本研究は、老年看護学概論受講後の学生の持つ高齢者イメージを把握し、老年看護の方法の授業(学内演習)や老年看護学実習の指導に活かすための知見を得ることを目的とした。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象者：A大学 2017年～2020年の期間に老年看護学概論を受講した後、老年看護の方法Ⅰを受講前の看護学部学生111名(調査予定期間にCOVID-19蔓延により、リモート授業となり調査を実施できなかった学生を除く)

2. 研究期間 2018年6月～2020年10月

3. 調査内容：

1) 対象者の属性

- (1) 性別 (2) 年齢 (3) 居宅(実家・寮・アパート等) (4) 兄弟姉妹(人数)
- (5) 高齢者との同居経験(祖父母の両方とある、祖父のみとある、祖母のみとある、同居経験がない、その他)
- (6) 高齢者との関わり経験の有無と頻度(毎日・ほぼ毎日、週に1または2回程度、月に1または2回程度、年に1または2回程度、ない・ほとんどない、その他)、高齢者に対する関心の有無(ある、どちらかといえばある、どちらでもない、どちらかといえばない、ない)
- (7) 認知症高齢者との関わり経験の有無と頻度(調査基準は(6)と同様)

2) 高齢者イメージ

- (1) 高齢者に持つイメージ(描画と語句)：「質問紙には、頭に思い浮かぶ高齢者のイメージを好きなように描画し、その描画の説明を簡単に言葉で記載してほしいこと、絵の上手い下手は関係ないこと」を文書及び口頭で説明した。
- (2) 高齢者イメージのもととなる人物：高齢者イメージのもととなった人物がいた場合、○印をつけて

回答してもらった。その他には欄外を設けた。

4. 分析方法

対象者の属性、高齢者イメージのもととなった人物については、調査結果をMicrosoft Excel 2019で単純集計した。語句に関しては、各対象者によって書かれた語句と語句数を抽出した。書かれた語句が例えば、「とても優しい」の場合は、「優しい」のように副詞や語尾等を取り除き、意味内容を示す語句を分析対象とした。また、「腰が曲がっている」「畑仕事をしている」のように行動や状態を表すものは、そのまま一つの語句として分析した。得られた語句を、意味内容から類似性に従い分類し、研究者で検討を行い、サブカテゴリーを抽出し、さらにサブカテゴリーからカテゴリーを抽出し、内容を反映させたカテゴリー名をつけた。分析結果の妥当性の検討は老年看護学分野の研究者で行った。

描画に関しては、心理的分析が目的ではなく、具体的に自身が持っているイメージを言語化するための道具として用いたため、描画数のみを抽出した。

研究対象者の属性と描画・語句数、得られたサブカテゴリーの中のポジティブ・ネガティブ(性格・パーソナリティ・対人関係)な語句の記載について χ^2 検定を行い、有意確率を $p < 0.05$ とした。解析ソフトはSPSS Statistics25を用いた。

5. 研究手続き、倫理的配慮

1) 質問紙依頼にあたっては、老年看護学概論の成績評価返却後に研究対象者に、研究目的・研究方法を説明し、質問紙(無記名自記式)への協力の承諾を得た後、封筒に入れた質問紙を配布した。併せて以下について文書及び口頭説明を行った。回答は任意であり、本研究に参加しなくても不利益にならないこと、回答は統計的に処理し個人を特定することはないこと、研究結果は研究の目的以外で使用しないこと、結果は公表すること、無記名でのアンケートのため個人情報保護されること、アンケートの記入は15～20分程度かかること、アンケートは無記名で行うため投函後の撤回は難しいこと、アンケートで得られたデータは、ロック式USBで保管し、アンケート用紙とともに鍵のかかる保管庫で管理すること、研究に関しての相談にはいつでも応じること、調査への回答をもって同意を得たものとする。

2) 回収方法は、研究担当者の研究室と離れた階の

廊下に設置してある鍵のかかる回収BOXに1週間の期限で任意で提出することとし、研究への参加の有無が自主的に決められることを保障した。なお、本研究は、秀明大学研究倫理委員会の承認（承認番号17E008AC）を受け、実施した。開示すべきCOIはない。

6. 用語の定義

性格：その人特有の感情や意思のありよう⁸⁾

パーソナリティ：個人の持つ一貫した行動傾向や心理

的特性⁸⁾

IV. 結果

1. 研究対象者の概要

研究の対象者は、老年看護学概論（表1）受講後、老年看護学の方法Ⅰを受講前の学生111名であり、55名（回収率49.5%）より質問紙の回収が得られた。

描画・語句・文字の記載が全くなかった質問紙を除いた54の質問紙を分析対象とした。

表1 本学老年看護学分野の概論と看護の方法Ⅰの授業構成

回	老年看護学概論(1年次前期)	老年看護の方法Ⅰ(2年次後期)
1	老年看護の理念と目標	加齢による変化とフィジカルアセスメント：呼吸・循環・体温
2	老年期にある人の身体的、認知的、社会的変化と特徴	加齢による変化とフィジカルアセスメント：摂食・嚥下
3	高齢者の豊かな暮らしとQOL	加齢による変化とフィジカルアセスメント：排泄
4	高齢者の生活史と価値観、健康歴	加齢による変化とフィジカルアセスメント：動作と移動
5	老年看護に活用できる理論（1）理論の概要	高齢者の総合的なアセスメント：
6	老年看護に活用できる理論（2）事例を用いた演習	評価スケール・アセスメントツールの活用
7	事例分析による理論の活用のグループワークの発表	高齢者疑似体験演習
8	高齢者の健康問題と介護予防の保健医療福祉制度	サクセスフルエイジング演習（1）6要素に基づいた事例検討
9	高齢者の権利擁護と尊厳ある介護	サクセスフルエイジング演習（2）健やかな老いのための支援
10	尊厳ある介護と家族介護者への支援	加齢による変化とフィジカルアセスメント：コミュニケーション
11	高齢者の尊厳ある看取り	高齢者の特徴を踏まえたコミュニケーション演習
12	高齢者が健やかに暮らせる地域づくりと多職種協働	個別性に合わせたコミュニケーション演習
13	保健医療福祉制度の変革の中で変化する老年看護の役割と展望	加齢による変化とフィジカルアセスメント：睡眠・清潔・性
14	老年看護の役割・課題のまとめ	老年看護の実践について
15	学修内容のグループ発表・確認テストの解説、総括	これまでの学びの振り返り、まとめ

2. 研究対象者の属性及び高齢者との関わり・関心など（表2）

研究対象者の性別は男性1名（1.9%）、女性53名（98.1%）、年齢の内訳は、18歳19名（35.2%）、19歳28名（51.8%）、20歳7名（13%）であり、平均年齢は18.8歳であった。居宅は、実家が30名（55.6%）、寮が20名（37%）、アパート等が4名（7.4%）であった。兄弟姉妹は、1人っ子6名（11.1%）、2人20名（37%）、3人19名（35.2%）、4人以上9名（16.7%）であった。高齢者との同居経験があるもの23名（42.6

%）、ないもの31名（57.4%）、高齢者との関わり経験は54名全員がありと回答した。現在の高齢者との関わり頻度が月1回以上あるもの30名（55.6%）、それ未満のもの24名（44.4%）、高齢者への関心があるもの38名（70.4%）、どちらでもないもの12名（22.2%）、ないもの4名（7.4%）であった。認知症の方との関わり経験があるもの17名（31.5%）、ないもの37名（68.5%）であった。認知症の方との関わり頻度が月1回以上あるもの3名（5.6%）、それ未満のもの51名（94.4%）であった。

表2 研究対象者の属性と高齢者との関わり・関心など

n = 54

項目		人数	%	内訳
1.性別	男性	1	1.9	
	女性	53	98.1	
2.平均年齢	18.8歳			18歳19名(35.2%)、19歳28名(51.8%)、20歳7名(13%)
3.居宅	実家	30	55.6	
	寮	20	37	
	アパート等	4	7.4	
4.兄弟姉妹	1人っ子	6	11.1	
	2名	20	37	
	3名	19	35.2	
	4名以上	9	16.7	
5.同居経験 (高齢者)	あり	23	42.6	あり：祖父母とも13、祖父のみ1、祖母のみ7、その他2(親戚)
	なし	31	57.4	
6-1.関わり頻度 (高齢者)	多い	30	55.6	多い：毎日(ほぼ毎日)10、週に1,2回程度8、月に1,2回程度12 少ない：年に1,2回程度9、ほとんどない12、その他3(数年に一度)
	少ない	24	44.4	
6-2.関心 (高齢者)	あり	38	70.4	ある15、どちらかといえばある23
	どちらでもない	12	22.2	
	ない	4	7.4	
7-1.関わり経験 (認知症)	あり	17	31.5	あり：血縁13、血縁以外4
	なし	37	68.5	
7-2.関わり頻度 (認知症)	多い	3	5.6	多い：毎日(ほぼ毎日)0、週に1,2回程度1、月に1,2回程度2 少ない：年に1,2回程度1、ほとんどない48、その他2(数年に一度)
	少ない	51	94.4	

* 高齢者との関わり経験は全員(54)あり

3. 描画と語句について

描画は、研究対象者一人につき0から10個の範囲で描かれており、平均値は2.7(中央値2)であった。語句数は、0から20個の範囲であり、平均値は5.8(中央値6)であった。語句については、内容分析を実施した。以下、【 】はカテゴリー、<>はサブカテゴリー、「」は語句を示す。()内の数字はそのカテゴリーの語句数(重複をカウントしたもの)、全体の総語句数に占める割合を示す。(表3)

分析の結果、語句の総数は314であり、同一または祖母、おばあちゃんのように同じ意味を示す語句をまとめると192の語句が得られた。その語句を吟味して整理・分類し、カテゴリー化を行った。分析結果の妥当性の検討は老年看護学分野の研究者間で行い、最終的に5カテゴリー、20サブカテゴリーを抽出した。5つのカテゴリーは【人物のイメージ】(17:5.4%)、【もの・ことのイメージ】(20:6.4%)、【身体的特徴】(72:22.9%)、【精神的特徴】(90:28.7%)、【社会的特徴】(115:36.6%)である。

【人物のイメージ】では<高齢者からイメージする人物>というサブカテゴリーを抽出した。これらには、「祖父」「祖母」など、高齢者から想像する人物そのものを示す語句を分類した。【もの・ことのイメージ】では<高齢者からイメージするもの・こと>というサブカテゴリーを抽出した。「盆栽」「老眼鏡」など高齢者の生活からイメージできるものや、「老害」などのネガティブなイメージが含まれた。【身体的特徴】からは、<筋力低下に伴う変化><感覚器の変化><外見から確認できる変化><補助具を使用><疾病や脆弱性>という5つのサブカテゴリーを抽出した。<筋力低下に伴う変化>には、「歩くのが遅い」「足腰が弱る」など、骨・筋系の生理的变化を分類した。<感覚器の変化>には、「耳が遠い」などの聴覚の変化、「老眼」などの視覚の変化等を分類した。<外見から確認できる変化>には、「腰が曲がっている」「手が震える」などのほか、「少食」などの行動変化も含まれた。<補助具を使用>には、「車いすに乗っている」「杖を使用」などを分類した。<疾病や脆弱性>には、「認知症」

表3 高齢者イメージ：得られた語句の内容分析

カテゴリ	サブカテゴリー	語句*
人物のイメージ (17:5.4)**	高齢者からイメージする人物《7:17》***	曾祖母・祖父(おじいちゃん)7・祖母(おばあちゃん) 5・ひ孫・高齢者・近所の高齢者・家政婦
もの・ことのイメージ (20:6.4) 《19:20》	高齢者からイメージするもの・こと	缶チューハイ・蜜柑・軒先・白黒テレビ・洗濯板・桶・盆栽・民謡・演歌・老眼鏡・キセル・コマ・めんこ・仏壇・紅葉マーク・おせんべい・揺れる椅子・老害2・害
身体的特徴 (72:22.9)	筋力低下に伴う変化《10:15》	足が悪い・歩くのが大変・よぼよぼしている・歩きにくい・懸命に歩く・歩くのが遅い(動きが遅い) 6・身体が思うように動かない・足腰が弱る・身長が低い・体の自由が利かない
	感覚器の変化《6:8》	耳が遠い2・高音が苦手・声が大きい・目が悪い2・黒目が白濁・老眼
	外見から確認できる変化《12:20》	腰が曲がっている7・痩せた・白髪・髪が少ない2・髪が短い・小さい・手が震える・足が震える・加齢臭・眼鏡をかける2・皮膚が弱い・少食
	補助具を使用《3:25》	押し車や歩行器を使用4・車いすに乗っている4・杖を使用17
	疾病や脆弱性《4:4》	認知症・糖尿病・病気になりやすい・体が弱る
精神的特徴 (90:28.7)	ポジティブな性格《4:23》	陽気・優しい17・人情あふれる・穏やか4
	ネガティブな性格《2:9》	すぐ怒る(怒りっぽい)8・メソメソする
	ポジティブなパーソナリティ《16:37》	経験豊富・発想豊か・物知り(知識が豊富)6・料理が上手2・笑顔(笑っている・ニコニコしている)11・にこやか2・気さく・かわいい3・あたたかい・ゆったりしている・おっとり2・生き生きしている・几帳面・意志が強い・親切・元気2
	ネガティブなパーソナリティ《14:21》	えらそう・威張る・無口2・堅い・怖い3・気が強い・傲慢・知識がない・地に足がついていない・非常識・無関心・心配性・頑固4・気難しい2
社会的特徴 (115:36.6)	ポジティブな対人関係《13:16》	知識を教えてくれる・面倒見がいい・孫に甘い2・お菓子をくれる2・食べ物をくれる・ほめてくれる・気に掛ける・名前を聞く・話すことが多い・会話が成立する・お小遣いをくれる2・お年玉をくれる・近所の人々と集まって話す
	ネガティブな対人関係《19:21》	口調悪く話す・周りが見えない2・口うるさい2・若い時の話をする・自分の話をする・人の話を聞かない・話が減る・表情がなくなる・反応がなくなる・何を話しているかわからない・理不尽な文句を言う・店で怒鳴る・一人で騒ぐ・大声をずっと出す・同じ話を繰り返す・顔は笑っているが怒っている・クレームを言う・好き嫌いをはっきり言う・面倒くさい
	夫婦関係《4:4》	ラブラブ・仲良し・亭主関白・配偶者がなくなっている
	仕事に関すること《3:11》	畑仕事をしている8・農作業をしている2・米を作っている
	外出に関すること《13:17》	定期的に集まる・食事会・世間話・買い物に行く・ゲームセンターにいる・徒歩でスーパーに行く・車を運転する・運動する2・電車で席を譲られる・ラジオ体操に行く・散歩(犬・公園・道)3・ゲートボールする・優先席に座る2
	家での生活に関すること《10:11》	日向ぼっこする・座椅子に座る・こたつに入る2・ストレッチする・掃除する・こたつでテレビを見る・ベッドで過ごす・いつも家の中にいる・外出しない・洗濯する
	行動の特徴に関すること《13:13》	たくさん服を着る・自分のことは自分でする・うろろうしている・寝るのが早い・早寝早起き・お経を唱える・事故が多い・元気に活動する・毎日同じことをする・小銭を持っている・活発に行動する・健康を意識する・寝ている時間が長い
	趣味や嗜好に関すること《12:14》	パンダナをする・趣味を極める・お茶を飲む3・酒を飲む・レコードをかける・編み物をする・ゴルフが好き・お酒が好き・ラーメンが好き・散歩が好き・美容にこだわる・料理が好き
	生活場所・お金に関すること《6:8》	田舎に住む2・老人ホーム・福祉施設で生活・在宅医療・医療費安い・年金で生活2

* 語句の右の数字はその語句を記載した研究対象者の人数、数字の記載のないものは1名のみ記載

** カテゴリの() 内は語句数・総語句数に占める割合を示す *** サブカテゴリーの《》内は、語句数:語句を記載した延べ人数を示す

などの高齢者に多い病名や「体が弱る」など身体機能の低下を示す語句を分類した。【精神的特徴】では＜ポジティブな性格＞＜ネガティブな性格＞＜ポジティブなパーソナリティ＞＜ネガティブなパーソナリティ＞の4つのサブカテゴリーを抽出した。＜ポジティブな性格＞には、「優しい」「穏やか」などを分類した。＜ネガティブな性格＞には、「すぐ怒る」「メソメソする」などを分類した。＜ポジティブなパーソナリティ＞には、「物知り」、「ニコニコしている」などを分類した。＜ネガティブなパーソナリティ＞には、「怖い」「頑固」などを分類した。【社会的特徴】では、＜ポジティブな対人関係＞＜ネガティブな対人関係＞＜夫婦関係＞＜仕事に関すること＞＜外出に関すること＞＜家での生活に関すること＞＜行動の特徴に関すること＞＜趣味や嗜好に関すること＞＜生活場所・お金に関すること＞の9つのサブカテゴリーを抽出した。＜ポジティブな対人関係＞には、「面倒見がいい」「お小遣いをくれる」などを分類した。＜ネガティブな対人関係＞には、「口うるさい」「人の話を聞かない」などを分類した。＜夫婦関係＞には、「仲良し」「配偶者がなくなっ

ている」などを分類した。「仲良し」に関しては、語句の傍に高齢者夫婦のような絵が描かれていたため、夫婦関係と判断した。＜仕事に関すること＞には、「畑仕事をしている」「米を作っている」などを分類した。＜外出に関すること＞には、「買い物に行く」「運動する」などを分類した。＜家での生活に関すること＞には、「こたつに入る」「ベッドで過ごす」などを分類した。＜行動の特徴に関すること＞には、「お経を唱える」「寝ている時間が長い」などを分類した。＜趣味や嗜好に関すること＞には、「お茶を飲む」「ゴルフが好き」などを分類した。＜生活場所・お金に関すること＞には、「田舎に住む」「年金で生活」などを分類した。

ポジティブな内容の記載(性格・パーソナリティ・対人関係のいずれかまたは重複して)があったものは37、ネガティブな内容の記載(性格・パーソナリティ・対人関係のいずれかまたは重複して)があったものは23、ポジティブ・ネガティブ両方の記載があったものは20、どちらも記載がなかったものは14であった。

4. 高齢者イメージのもととなった人物描画・語句記載にあって高齢者イメージのもととなった人物の記載を求めた結果、祖母 23（以下数字は人数）、祖父 15、祖父母（夫婦）23、近所の高齢者 23、友達の祖母 3、親戚の高齢者 9、偉人 0、アニメ・マンガ 4、小説・本 1、テレビドラマ 5、CM 1、その他 11 であった。その他の欄外に、バイト先の客と記載したものが 9 であった。（表 4）

表 4 高齢者のイメージのもととなった人物

項目	人数	備考
祖母	23	
祖父	15	
祖父母(夫婦)	23	
近所の高齢者	23	
友達の祖父母	3	
親戚の高齢者	9	
偉人	0	
アニメ・マンガ	4	ちびまる子のおじいさん、サザエさんの波平など
小説・本	1	不明
テレビドラマ	5	花より団子の家政婦、家政婦は見たなど
CM	1	不明
その他	11	バイト先の客など

5. 高齢者との関わりなどと描画・語句数やポジティブ・ネガティブなイメージと関連しているかに関して χ^2 検定を実施した。描画数の平均値は 2.7、語句数の平均値は 5.8 であったため、分析は

表 5：高齢者との関わりなどと描画・語句数、ポジティブ・ネガティブな記載の関連（ χ^2 検定）

n = 54

項目 () 内の数値は人数		高齢者との同居経験		P値	高齢者との関わり頻度		P値	高齢者への関心 Δ ：どちらでもない			P値	認知症の関わり経験		P値
		なし (31)	あり (23)		少ない (24)	多い (30)		なし (6)	Δ (9)	あり (39)		なし (37)	あり (17)	
描画数	少ない(39)	23	16	0.707	15	24	0.154	4	7	28	0.889	26	13	0.637
	多い(15)	8	7		9	6		2	2	11		11	4	
語句数	少ない(31)	19	12	0.503	12	19	0.325	3	7	21	0.394	21	10	0.887
	多い(23)	12	11		12	11		3	2	18		16	7	
性格ポジティブ記載	なし(36)	20	16	0.697	20	16	0.02*	3	3	30	0.029*	26	10	0.407
	あり(18)	11	7		4	14		3	6	9		11	7	
性格ネガティブ記載	なし(45)	24	21	0.176	19	26	0.462	3	8	34	0.067	32	13	0.359
	あり(9)	7	2		5	4		3	1	5		5	4	
パーソナリティ ポジティブ記載	なし(29)	17	12	0.846	13	16	0.951	3	5	21	0.977	20	9	0.939
	あり(25)	14	11		11	14		3	4	18		17	8	
パーソナリティ ネガティブ記載	なし(42)	23	19	0.462	20	22	0.38	5	5	32	0.213	29	13	0.876
	あり(12)	8	4		4	8		1	4	7		8	4	
対人関係 ポジティブ記載	なし(42)	23	19	0.462	18	24	0.661	4	6	32	0.476	32	10	0.023*
	あり(12)	8	4		6	6		2	3	7		5	7	
対人関係 ネガティブ記載	なし(43)	23	20	0.25	20	23	0.546	3	5	35	0.012*	28	15	0.287
	あり(11)	8	3		4	7		3	4	4		9	2	

* 描画数は少ない:3未満、多い:3以上 単語数は少ない:6未満、多い:6以上 関わり頻度は多い:月1回以上、少ない:月1回未満

* $p \leq 0.05$

描画数3以上、語句数6以上、高齢者との関わり頻度については月1-2回以上を多い、それ未満を少ない、同居経験と認知症の方との関わり経験、性格・パーソナリティ・対人関係のポジティブ・ネガティブな記載に関してはあり、なし、高齢者への関心については関心がある、どちらでもない、ないとし、数値に変換し分析した。その結果、有意差が認められたのは、高齢者との関わり頻度と性格のポジティブな記載($p=0.02$)、高齢者への関心と性格のポジティブな記載($p=0.029$)、高齢者への関心と対人関係のネガティブな記載($p=0.012$)、認知症の方との関わり経験と対人関係のポジティブな記載($p=0.023$)だった。なお、認知症の関わり頻度については、多いものが3、少ないものが51と回答人数差が大きかったため今回の分析からは除外した。(表5)

V. 考察

1. 研究対象者の高齢者との関わり経験などと高齢者イメージの関連について

今回の調査結果では、高齢者との同居経験のあるものが23(名)(42.6%)、高齢者との関わり頻度が月1回以上あるものが30名(55.6%)と高齢社会白書²⁾のデータより高い数値を示した。そこで高齢者との同居や関わりの経験などが、高齢者に対して抱くイメージに影響しているのではないかと考え、それらと描画・語句数、ポジティブ・ネガティブな語句の記載の有無について χ^2 検定を実施した。本研究においては、高齢者の同居経験との間には、分析したすべての項目について有意差が認められなかった。これは先行研究⁹⁾と同じ結果であった。大谷ら¹⁰⁾は、高齢者との単なる接触や同居の有無より、会話機会の頻度がイメージ形成のうえで重要であることを指摘している。本研究でも高齢者との関わり頻度と性格のポジティブな記載に関連($p=0.02$)が認められた。

また、高齢者への関心の有無と対人関係のネガティブ記載には有意差($p=0.012$)が認められたが、高齢者に関心があると答えた人で対人関係のネガティブな記載をした人は少なかった。また、高齢者に関心があると答えた人は性格でネガティブなイメージ記載がない人が多かった。高齢者に関心のある人は、性格や高齢者の対人関係をネガティブにとらえない傾向があるといえる。検定結果からは、高齢者には関心を持って性格のポジティブな記載なしの人が必ずしも性格をネガティブにとらえているとはいえないが、例えば

老年看護の方法の看護過程の授業で用いる事例作成時に、現実的なネガティブな側面も示しつつ、意識的にポジティブな側面を表現していくなど教材を工夫していくことで元々高齢者に関心がある学生はポジティブな側面にも視点を広げられる可能性がある。対人関係がネガティブというイメージは、実習においての高齢者との関わりへの抵抗感や不安を増幅させる可能性がある。現在も授業で軽費老人ホーム入居者をゲストスピーカーとして招聘し、生きがいや生活などについて話を聞く機会を設けているが、高齢者に関心をもち、接する機会を増やす教材の工夫によって、高齢者のポジティブイメージの形成につながるのではないかと考える。また、認知症の方との関わり経験と対人関係のポジティブな記載($p=0.023$)にも関連が認められた。認知症の方との関わり経験がない人は対人関係のポジティブな記載がなかった。先行研究では、看護学生と健康な高齢者が直接触れ合うことで肯定的なイメージが生まれる¹¹⁾ことがわかっている。認知症の方との関わりが高齢者の対人関係における感情の交流や関係の豊かさに気づくきっかけになっている可能性がある。以上のことから認知症のあるなしにかかわらず、高齢者理解のためには、高齢者との関わりをもつ機会を増やしていくことが望ましいと考える。

2. 研究対象者が持つ高齢者イメージについて

本研究では、高齢者イメージのもととなった人物は、「祖母」23、「祖父」15、「祖父母(夫婦)」23、「近所の高齢者」23、「友達の祖父母」3、親戚の高齢者9など、身近な人物を挙げた学生が多かった。アニメ・マンガ、本、テレビドラマなど身近に実在しない人物を挙げたものは、合計11と少なかった(重複回答)。その他11のうち欄外に、アルバイト先の客と記載したものが9であり、アルバイトが大学生の生活の中で高齢者と触れ合う機会となっていることが示唆された。

【身体的特徴】のカテゴリーには、加齢に伴う生理的变化についての記載が多く挙げた。＜筋力低下に伴う変化＞＜感覚器の変化＞＜外見から確認できる変化＞＜補助具を使用＞は、いずれも、老年看護学概論の授業(表1)で、既習の身体的変化が多く含まれていた。＜疾病や脆弱性＞にあがった「認知症」「糖尿病」という高齢者に多い病名や身体機能の低下については、2年次以降に老年看護の方法で特に学修する内容であり、語句数も4と少なかった。

先行研究では、学生が「老化や活動性低下などのマ

イナスイメージに囚われがちとなり、高齢者だからこそ持ち合わせている力に視点が向かない」⁶⁾という現状があることが明らかになっている。また、その人らしい生活を支援する『活動（課題や行為の個人による遂行）と参加（生活・人生場面への関わり）』『環境因子（人々が生活し人生を送っている物的・社会的環境、人々の社会的な態度による環境を構成する因子）』についての重要性の認識が浅い¹¹⁾ことがわかっている。しかし、今回の研究結果からは、身体的特徴よりも社会的特徴の語句が多く挙がっていた。老年看護学概論に、高齢者の社会的特徴を理解する学修内容が含まれていることも影響していると考えられる。社会的特徴について全く挙がらなかったものが13名いた。一方、3語句以上挙げたものも18名おり、最も社会的特徴に関して多く挙げたものは10語句を挙げていた。学生の挙げた言語数に差異があることから、すべての学生が高齢者を身体的・精神的・社会的3側面から理解を深められるよう、加齢による「身体的特徴」「精神的特徴」が活動や参加、環境因子にどう影響しているかについて、今後も引き続き授業や実習において関連させて学修を深めていく必要性が示唆された。今回、学生の挙げた身体的特徴のイメージの中で、「動作が遅い」が一番多かった。加齢とともに行動する速度は一般的には低下するが「ゆっくりだが、自分でできる」と捉えればこれらは高齢者の強みともいえる。その人の持つ力を最大限に活かし、その人らしさを発揮できるように、エンパワメントを活用できるような助言を教員が行うことができれば、学生の視点が、ネガティブからポジティブにパラダイムシフトし、「活動と参加」の援助につながる可能性がある。

また、学生が、若く健康で老化現象の体験がないことから、「老化」による「健康問題に応じた看護」や「身体的・精神心理的・社会的特徴」がどのようなものであるか理解することが難しいこと³⁾もわかっている。本学でも「老年看護の方法Ⅰ」の授業において、高齢者疑似体験のシミュレーション学習を取り入れているが、先行研究ではその効果とともに限界^{12,13)}も示されている。高齢者施設実習以前に高齢者受け持ち経験がある学生のほうが、受け持ち経験のない学生よりも施設実習に価値を感じ、実習に納得を得ている⁵⁾という研究結果からも、実際に高齢者と触れ合う機会を多く持つことが高齢者理解のためには重要だといえる。本研究では、社会的特徴に関しては、115の語句が挙げられた。しかし、ポジティブな対人関係（16）より、

ネガティブな対人関係（21）の語句が多く挙げられた。先行研究では、実習後に高齢者への好意的感情や関心が増していること⁹⁾や、肯定的なイメージに変化している¹⁴⁾ことが明らかになっている。本研究でも、高齢者との関わり頻度と性格のポジティブな記載や認知症の方との関わり経験と対人関係のポジティブな記載にも関連が認められたことから、可能であるならば、老年看護学実習開始前に、少しでも学生が、実際に血縁者やそれ以外の高齢者と接する機会を持つことで、高齢者の持つ知識の豊かさ、温かさなどの「強み」などのポジティブな側面に視点が向けられる可能性がある。看護実践においては、人間関係を基盤にして行うため、多様な価値観を持つ人や世代や立場の異なる人々の思いや考えを理解し、円滑に意思疎通を図り、ケアに必要な援助的人間関係を形成していく¹⁵⁾ことが求められる。

老年看護学実習において学生は、コミュニケーションを通して、高齢者の生まれ育った時代背景を知り、過去の体験が現在の高齢者の価値観にどのように影響しているかを理解し関わる必要があることを指導している。また、援助を通し、身体や精神機能の低下が対象の生活に及ぼす影響を知らなければ、その人らしい生を支える援助につながらない。高齢者は、身体機能の障害が複合的に生じやすく、慢性化・重症化しやすい。また、身体上の問題、例えば、歩行の不自由が、外出機会や人との関わりの減少につながり、精神的・社会的問題を生じさせたり、生活上の問題を引き起こしたりする。学生は、対象の持つ能力と実際にやっていることの査定を行い、QOLを高められる関わりを考え実習している。普段の生活から、学生が高齢者と積極的に関わり「身体・精神・社会的特徴」を捉えられるよう高齢者施設でのボランティア機会の提供など高齢者との関わりを増やす方略を考えていく必要がある。

Ⅵ. 結論

本研究において、学生の高齢者イメージについて分析し、明らかになったことは以下のとおりである。

1. 高齢者との関わり頻度と性格のポジティブな記載、高齢者への関心と性格のポジティブな記載、高齢者への関心と対人関係のネガティブな記載、認知症の方との関わり経験と対人関係のポジティブな記載に関連が認められた。
2. 社会的特徴（対人関係）に関しては、ネガティブ

な語句が多く挙げた。

3. 学生が高齢者イメージとして挙げた語句と、老年看護学概論で学修した内容が重なっていることから、学生の持つ高齢者イメージは授業の影響を受けていると考えられる。

以上を踏まえ、「老い」を生きる高齢者を支える基盤として高齢者理解が深まり、高齢者に対する正しいイメージを持ち、高齢者の持つ「ポジティブ」な側面にできる限り目を向け働きかけられるような学修方略の工夫と高齢者と接する機会を増やすことが高齢者理解には必要であることが示唆された。

今回の研究では、質問紙回収数が55(分析数は54)と少なく、本研究の結果が必ずしも、看護学生の持つ一般的な高齢者イメージと一致するとは言えないため研究の限界はあるが、3年間にわたる累積調査により、学生の持っている高齢者イメージから、一定の示唆を得ることができた。また、少数ではあるが、「非常識」「傲慢」などの強いネガティブなイメージを持つ学生が一定数いることもわかったが、今回の研究ではその理由は明らかにならなかったため、今後の課題とする。

引用文献

- 1) 厚生労働省(2018.3.1):平成29年(2017)患者調査の概況〈<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/dl/kanja-01.pdf>〉
- 2) 内閣府(2020.2.25):令和元年版高齢社会白書〈<https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/html/zenbun/index.html>〉
- 3) 今井弥生:学生のレディネスに応じた介護老人保健施設における実習方法, 臨床福祉ジャーナル, 7(1), 50-54, 2010.
- 4) 今井 弥生:保健医療福祉チームとしての多職種役割連携について, 臨床福祉ジャーナル, 7(1), 6-11, 2010.
- 5) 荒井 淑子, 佐藤 敏子:介護老人保健施設での実習教育評価(第2報), 梶山女学園大学看護学研究, 1, 11-18, 2009.
- 6) 小林 紀明, 杉山 洋介, 黒白 恵子, 他:複数の保健・福祉施設における老年看護学実習の学習効果, 目白大学健康科学研究, 2, 65-72, 2009.
- 7) 文部科学省(2011.3.11):大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm〉.
- 8) 北川公子, 井出訓, 植田恵, 他:系統看護学講座専門分野Ⅱ 老年看護学, 第8版 第1刷, 医学書院, 12, 2014.
- 9) 穴井 美恵, 荻野 朋子, 大平 政子:看護大学生の高齢者のイメージ, 中京学院大学看護学部紀要, 2(1), 11-17, 2012.
- 10) 大谷英子, 松本光子:老人イメージと形成要因に関する調査研究, 日本看護研究学会雑誌, 18(4), 25-38, 1995.
- 11) 樋田小百合, 熊田ますみ, 大瀧康平, 他:健康高齢者との関わりによる看護学生の高齢者イメージ, 岐阜医療科学大学紀要, 8, 7-15, 2014.
- 12) 岡本紀子, 高田大輔, 泉キヨ子:高齢者疑似体験における体験と観察を通しての看護系大学1年生の気づき, 帝京科学大学紀要, 9, 139-145, 2013.
- 13) 宮路亜希子, 大淵 律子, 平松万由子:高齢者疑似体験演習を生かした老年看護学実習での学びに関する検討, 三重看護学誌, 10, 13-22, 2008.
- 14) 古市 清美, 高橋 ゆかり, 鹿村 真理子, 他:認知症高齢者に対する看護学生のイメージ変化とその要因, 日本看護学会論文集 精神看護, 42, 241-244, 2012.
- 15) 谷本 真理子, 鳥田 美紀代, 田所 良之, 他:老人ケア施設実習における高齢者理解のための方法としてのナラティブ面接の意義, 千葉大学看護学部紀要, 31, 27-31, 2009.

